

ひまわりばたけ

瓢鰻亭 ひまわり書店 みやこ町豊津 326-1 Tel 0930-33-8080



瓢鰻亭は今

前田 賤

七月の半ばになって例年通り瓢鰻亭は今、蟬の大合唱に包まれています。改めて大自然に畏敬の念を感じるこの頃です。

先月定例第三日曜日の「絵本の勉強会」は四年振りの開催で、参加者は子供さんを含めて五人でした。テーマは時節柄「平和と戦争」。関係する絵本は「ひまわり書店」在庫のみでも三〇冊を超え、考えてみれば全ての芸術は人々の幸せを追求するものとあれば当然でもありません。

朗読披露はまず参加者の方のご持参の「ぼくがラーメンをたべてるとき」で、この国の何処にでもある子どもの日常。だけど今この同じ時間のどこかで男の子が水牛を率いて土地を耕しており、また別の国のある所では年端もいかぬ女の子が家事をしていたり、またある所では爆撃(?)により倒れる子どもがい

たり…。

同じく長谷川義史さんの絵で沖繩の小学一年生の詩を絵本にした「へいわってすてきだね」。もう一冊は映画「マンハッタン計画」の先駆けと言われている「この計画はひみつです」をみんなで読み合わせをしました。また、小倉の到津の森公園

(動物園)の戦争中での動物殺傷の悲しい話「ももたろうからのてがみ」も紹介されました。作品に描かれている桃太郎像は日本のアンデルセンと呼ばれた久留島武彦の発案で作られたもので、戦中、戦後の苦難を乗り越え、玖珠町に現存します。

ひまわりイベント 8月と9月

8月

- 2日(土) 笠着連歌 19時 今井公民館
- 9日(土) ひまわり連歌 11時
- 14日(木) 楽しく歌おう 松尾範子教室 10時
- 16日(土) 子ども連歌 17時
- 17日(日) 絵本の勉強会(怖いお話) 13時
- 24日(日) 今井連歌の会月次連歌 13時 今井公民館



9月

- 6日(土) ウクレレとピアノのコンサート
魚とSOSOのイッタリキタリ 19時から21時 2000円
- 10日(水) 行橋市民講座「連歌」 13時30分 行橋中央公民館
- 12日(金) 楽しく歌おう 松尾範子教室 10時
- 13日(土) ひまわり連歌 11時
- 19日(金) 楽しく歌おう 松尾範子教室 10時
- 20日(土) 子ども連歌 17時
- 21日(日) 絵本の勉強会(教科書に載っている低学年の絵本) 13時
- 28日(日) 今井連歌の会月次連歌 13時 今井公民館

再開と追憶

くおん すんじん
権 純珍



お盆休みは、実家に帰省し、ご先祖様のお墓参りをし、家族や親戚、懐かしい友人たちに再会する時期である。再会といえば、七夕の夜、織姫（織女）と彦星（牽牛）が一年に一度だけ「天の川（銀河）」にカササギが架けてくれた橋を渡り、めぐり逢うことができたという「七夕伝説」を思い出す。

人々は出逢いを体験すると、再会を望んだり求めたりするもので、再会するまでの事情や期間、その追憶も多様である。織姫と彦星のように年に一度会えることもあれば、数十年ぶりの再会もある。

二〇二二年八月のお盆休みの時

である。妻が子どもの頃から通い続けている、豊津の本屋「瓢鰻亭・ひまわりこども」で、新たな出逢いと再会があった。それは、人ではなく絵本と童話の本である。新たに出逢った本、つまり偶然見つけた本が『つくえはつくえ』（五味太郎二〇一八年一月）である。

「…ひろすぎないかつ せますぎないつくえだ！ もんくあるか？！ わ ちようどいいきがする！」

きがするんじゃない ちようどいいのだ…」

この絵本からは、日頃、口にする「ちようどいい」という言葉の重要性を教わった。

この本を読み終わった後、どうしてももう一度読みたくなった本があった。それは児童文学のジャンルで、7つのストーリーが書いてある短編集、『テーブルはテーブル』（翻訳本、ペーター・ビクセル：2016）である。

二〇二二年一二月末、瓢鰻亭の

前田賤さんのお陰で、その本を手にすることができた。これは大学一年生の頃に読んで以来、約50年ぶり手にする本で、その頃の記憶が鮮明に蘇った。

主人公（老人）はあえて社会的約束である「言語（言葉）」を入れ替えて使用した結果、人との対話が断絶されてしまい苦痛を被るというストーリー。他者とのコミュニケーションを拒み、自分自身の信念に執着するあまりに社会のルールを無視し、意思疎通が不可能となり、現実社会から疎外されてしまう。ここで本のタイトルにもなっている「テーブルはテーブル」の一部を紹介する。「…なぜベッドのことを絵と言わないのじゃ」と老人は考え、そしてにやりとしました。…このときからベッドのことを『絵』と言うようになりました。…老人のじゆうたんを世間ではテーブルと言います。…」

主人公は大人でありながら、自制心や理性的かつ合理的な面はなく、子どものように一つのことには没頭し、

ある意味でわがままな行動をとっている。このユーモラスなストーリーは、現代社会が抱えている「孤立と疎外、偏見などによる人間関係の問題解決」のヒントを示唆している。また、表現が多少大袈裟で非現実的な側面もあるが、主人公の立場からみると「共感」できる部分が多くある。結局、「テーブルはテーブル」と言うしかないが、このストーリーは社会のルールや一般常識に従わないときの疎外と偏見について改めて考える機会を与えてくれる。目に見えるものに執着している大人とは違って、「出逢い、友情、追憶、愛」など、目に見えないものとその重要性を教えてくれる『星の王子さま』にも再会できた。2冊の本との約50年ぶりの再会と変わらぬ感動が嬉しかった。

賤さんには、これからも色々な本との新たな出逢いや再会ができるよう、カササギが天の川に架けたような橋や出逢いの場を提供してほしいと願っている。